カラダづくり

のどの痛みや首に腫れ

✽中咽頭がん

近年、のどの「中咽頭」にできるがんが急増している。かつては喫煙や飲酒が主な原因となっていたが、ウイルス感染による発症が国内外で目立ってきているという。どんな特徴があるのだろうか。

中咽頭がんは、舌の付け根（舌根）や扁桃あたりの領域に発生するがんだ。かつては喫煙や飲酒が主な原因となっていたが、近年はヒトパピローマウイルス（HPV）の感染が原因となる中咽頭がんが急増している。

大阪大学大学院の猪原秀典教授（耳鼻咽喉科・頭頸部外科学）は「日本では年間推定5000人強が中咽頭がんを発症しているが、現在はその半数以上がHPV感染によるものと見られ、今後も増加傾向が見込まれる」と話す。

HPVはありふれたウイルスで、子宮頸がんの原因になることが知られている。主に性的行為の際に皮膚や粘膜の小さな傷から侵入し感染するが、ほとんどは体の免疫により自然に排除されていく。しかし、感染を繰り返すうちにごく一部が定着し、その状態が長く持続することでがん化していくと考えられている。

中咽頭がんでは、舌根や扁桃の「陰窩」という小さなくぼみの奥底にHPVが感染しがんが発生する。そのためHPV関連の中咽頭がんは、最初にがんが出来た部位（原発巣）が分かりにくく、早期発見が難しい特徴がある。

男性は女性の3倍／ウイルス感染型が増加

横浜市立大学医学部耳鼻咽喉科・頭頸部外科学の折舘伸彦教授は「喫煙・飲酒が原因の場合の発症年齢は50～60代以降が多い一方、HPV関連では40代でも発症する。いずれの原因でも男女比は3対1で男性の方が多い」と話す。

初期には自覚症状が出にくいが、喫煙・飲酒が原因の場合は原発巣が大きくなってくると、のどの違和感や痛み、飲み込みにくさといった症状が現れてくる。さらに進行して広範囲の切除や治療が必要になれば、開口や嚥下、発声などの重要な機能が損なわれることがある。

HPV関連の場合は原発巣が小さく、リンパ節に転移しやすいために、まず首に腫れやしこりが現れることもあるという。「男性はひげ剃り、女性はスキンケアの際に首に触れることで気づきやすい」（折舘教授）

HPV関連の中咽頭がんでは、リンパ節転移が嚢胞化することがあるのも特徴だと、猪原教授は指摘する。嚢胞は液体が溜まる袋状の病変で、その多くは良性であるために、がんが見逃されることがあるそうだ。「超音波（エコー）検査などで首の側面に嚢胞が見つかったときは、がんの可能性があることを覚えておきたい」（猪原教授）

治療はいずれの原因でも、早期では手術か放射線治療、進行がんでは手術後に放射線治療を行うか、抗がん剤と放射線を併用する化学放射線療法を検討するのが一般的だ。

HPV関連の中咽頭がんは、喫煙や飲酒が原因となるものに比べて予後が良いことが分かっている。ただ、治療後に唾液が減少することで常にのどの渇きを感じ、会話に支障を来たしたり、味覚が低下したりといった後遺症があった場合、がんを克服した後もQOL（生活の質）の低下に長く苦しむことになる。そうした事態を避けるためには、できるだけ早期に気づくことが大切だ。

HPV関連の中咽頭がんは世界的にも急増しており、HPVに感染する前にワクチンを接種することで、発症を予防できる可能性が示唆されている。欧米の先進国ではHPVワクチンの定期接種を男女共に実施する国が増え、日本でも議論されている。

現時点では日頃から首やのどの異変に注意し、気になることがあれば早めに耳鼻咽喉科を受診するようにしたい。

（ライター　田村　知子）

中咽頭がんの主な原因と特徴

喫煙や飲酒

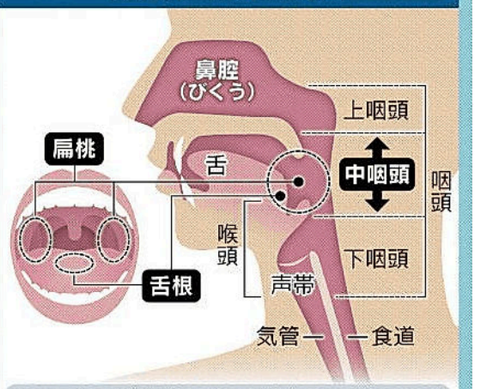
- 50～60代以降に発症する人が多い

ヒトパピローマウイルス（HPV）の感染

- 主に性的行為が感染の機会になる
- 比較的若い40代でも発症する

いずれの原因でも、男女比は3:1で男性の方が多い

がんができる部位



HPV感染が原因の中咽頭がんは、舌根や扁桃にある小さなくぼみ「陰窩」の奥底から発生する

主な症状

- のどの違和感や痛み
- 飲み込みにくさ
- 首のリンパ節の腫れやしこり

ひげ剃りやスキンケアのときに、首に腫れやしこりがないかを確認しよう

主な治療法

がんの部位や広がり、進行具合、リンパ節や他の臓器への転移の有無、機能の温存などを考慮して選択される

早期がんの場合

- 手術か放射線治療

進行がんの場合

- 手術後に放射線治療
- 化学放射線療法（抗がん剤と放射線を併用）

進行がんの治療では、嚥下や味覚などに障害が残りやすい

許諾番号30095423　日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。
掲載日 2023年09月09日 日経プラスワン 011ページ © 日本経済新聞社 無断複製転載を禁止します。